

農作物生産情報 (平成30年 5月)

気象

(平成30年 4月25日 仙台管区気象台発表 東北地方3か月予報より)
天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

水稲

健苗育成と適正施肥、良食味・高品質米を生産しよう！

1 育苗

(1) 温度管理

5月は気温が高くなり、ハウス・トンネル内の温度も高くなるため、積極的な換気に努める。

降霜や低温が予想される場合は、被覆資材やストーブなどで保温する。

■温度管理の目安

葉数	温度管理
出芽揃～1.5葉	日中30℃以下、夜間5℃以上
1.5葉～3.0葉	日中25℃以下、夜間5℃以上
3.0葉～3.5葉 (田植え)	日中20℃以下、夜間5℃以上 田植え5日前頃には、霜注意報発令時や強風の時以外は、できるだけ夜間も外気に慣らし、丈夫な苗に仕上げる。

(2) 水管理

かん水するタイミングは、床土が乾き、苗の葉が巻き始めた頃で、午前中に箱底まで届くようにたっぷりかける。

機械的に毎日かん水すると、草丈が伸びる割には葉齢の進まない軟弱苗となり、田植え後の活着や初期生育が劣る。このため、育苗中はできるだけ節水し、硬い苗に育てる。

(3) 追肥

田植え前に苗の葉色が淡くなった場合は、1箱当たり硫安5g（窒素成分で1g）を水500mlに溶かして追肥する。追肥後は、肥料ヤケを起こさないよう葉が乾く前にかん水して肥料分を洗い流す。

2 本田

(1) 畦畔の補強

畦畔にネズミ穴などがあると水持ちが悪くなり、除草剤の効果が劣ったり、低温時の深水管理が十分できなくなるので早めに補強する。

(2) 施肥

昨年、稲が倒伏したり、いもち病が発生した水田では、窒素量を減らす。

なお、窒素量が多すぎると、食味・品質の低下や倒伏、いもち病等の原因となるので地帯別、品種別施肥基準を遵守する。

■施肥量（窒素成分量）の目安（中苗移植）

品 種	施肥体系	窒素総量 (kg/10a)	基 肥 (kg/10a)	追 肥 (kg/10a)
つがるロマン	表層 1 回追肥	6 ～ 8 kg	4 ～ 6 kg	2 kg以内
まっしぐら	表層 1 回追肥 ----- 表層 2 回追肥	6 ～ 9 kg	総量の 7 ～ 8 割 ----- 総量の 6 割	総量の 2 ～ 3 割 ----- 1・2回目とも 2 割
青天の霹靂	<ul style="list-style-type: none">・施肥体系は表層 1 回追肥体系を原則とする。・適正生育量が確保できるよう、基肥は窒素成分量で 6 kg/10a程度とする。・追肥時期は幼穂形成期とする。追肥の窒素成分量は乾田で 2 kg/10a、半湿田で 1 kg/10a以内を目安とする。・転作後の復元初年目の水田は、施肥による生育コントロールが 困難なので、本品種は作付けしない。			

(3) 代かき

代かきは、田面に高低差が生じないように行う。

生わら鋤込み田や田畑輪換田等の作物残渣がある水田では、これを土中に鋤込むため、浅水で代かきを行う。

(4) 田植え

日平均気温が13℃以上になるときを目安とする（五所川原アメダスの平年値では5月13日以降）。代枯れ防止と活着促進のため強風の日を避け、温暖な日を選ぶ。

「青天の霹靂」の栽植株数は70株/坪程度とし、直播栽培・疎植栽培は行わない。

(5) 田植え後の水管理

田植え後は直ちに水を入れ、初期生育促進のため、低温時は苗が冠水しない程度の深水管理、高温時は浅水管理とする。

昼間止水・夜間かんがいを基本とし、掛け流しはせず、水温を上げるようにする。

■分けつ期の水管理の目安

天 候	暖かい日	寒い日
水 管 理	3 cm程度の浅水	5 ～ 6 cm程度の深水

(6) 除草剤の使用法

除草剤は、前年発生した雑草を考慮して選び、使用基準を守る。なお、除草剤を適正に使用しても特定の草（アゼナ、ホタルイ等）が大量に残る水田では、抵抗性雑草が発生している可能性があるため、これらに効果のある除草剤を選択する。

初期＋中期の体系処理の場合は、中期剤の処理が遅れないように適期に散布する。

河川等の水質を保全するため、**散布後7日間**は絶対に落水・掛け流しをしない。

(7) 病虫害防除

ア 箱施用剤使用の留意点

いもち病や初期害虫等を予防する箱施用剤は、薬剤毎に使用時期や方法が異なるので、農薬の登録内容等を確認して適正に使用する。

イ イネミズゾウムシ

移植前や移植時に防除をしなかった場合は、発生に応じて防除する。

発生が多い場合には、6月上旬頃に水面施用剤を散布する。この時期の防除によりイネドロオイムシも防除できる。

ウ 葉いもち

補植用苗をほ場に放置したままにしておくと「葉いもち」の発生源となるので、補植が終わったら直ちに処分する。

(8) 農薬危害防止

育苗跡地で野菜等を栽培する場合は、育苗箱用の農薬処理を育苗ハウス外で行うか、ハウス内で行う場合は無孔のビニールシートを使用するなど、農薬が土壤に浸透しない対策を行う。

りんご

黒星病重点防除時期の「開花直前」～「落花20日後頃」の散布間隔は10日以内を遵守し、黒星病対策を徹底しよう！

霜害防止対策を万全に、適期作業と適正防除で良品生産を目指そう！

県生育観測ほ（板柳町五幾形）のふじの発芽日は平年より7日早い4月2日であったが、その後の低温により展葉日は昨年と同じ4月16日（平年より3日早）であった。ふじの開花日は板柳町で5月4日前後と予想される。

1 霜害防止対策

開花前後は最も低温に弱い時期のため、霜注意報が出されたら霜害防止対策を確実に実施する。

(1) 霜害発生危険温度

花蕾着色期で -2°C 、開花始め～幼果期で -1.5°C くらいの低温に約60分遭遇すると被害が出始める。

降霜は、晴天無風で午後7時の気温が 6°C 以下の日の翌日早朝に発生する可能性が高い。

(2) 燃焼法

霜注意報が出たら、自園の気温の動きを観察し、0℃になったら燃焼資材に点火する。

■燃焼法による防止

種類	利用方法
A重油オイル缶	4リットル缶を利用する場合、10a当たり30缶以上を配置する。
霜カット	おがくず：灯油＝2：1（容量）の割合で混ぜたものを2kgずつ袋に詰め、10a当たり40～60個を配置する。

- 注) 1 灯油の保管量が200～1000ℓ：少量危険物貯蔵届出書の提出が必要
2 " 1000ℓ以上：危険物取扱者の資格が必要
3 所轄の消防署に「火災と紛らわしい煙又は火災を発する恐れがある行為の届出書」などを提出する。

(3) 送風法（防霜ファン）

防霜ファンを設置している園地では、ファンの始動温度を2℃に設定しておく。寒気を伴ったときや著しく低温になったときは、防止効果が低いので燃焼法を併用する。

幼果期に被害を受けた年もあったことから、結実後でもファンのスイッチは切らない。

(4) 事後対策

開花期までに霜害にあった場合は、結実量を確保するため、必ず人手授粉を実施する。その際、めしべの被害程度を確認して授粉する。

2 人手授粉による結実確保

マメコバチを導入していない園地では、安定した結実量を確保するために人手による授粉を徹底する。また、マメコバチ導入園においてもその数が少ない場合や不順天候が続く場合には、人手による授粉を行って結実確保に努める。

3 摘花・摘果

良品安定生産のためには早期適正着果が重要であるので、摘花を積極的に実施する。ただし、降霜常襲地帯や開花期に不順天候が予想される場合は、一輪摘花の実施や摘花剤の使用を控え、えき芽花の摘み取りにとどめる。

(1) 摘花

ア 人手による摘花

弱い花そうやえき芽花等の不要な花そうは、全花摘み取る。

イ 摘花剤の利用

結実が十分確保されると見込まれる場合は、石灰硫黄合剤又はエコルーキーを利用する。使用方法は下表のとおりである。なお、いずれの剤も展着剤は不要である。

■石灰硫黄合剤及びエコーキーの使い方

薬 剤 名	散布時期	本剤の 使用回数	成分総 使用回数	希釈倍数	10a当たり 散布量
石灰硫黄合剤	満開後 (頂芽花の満開日 とえき芽花の満開 日)	2回	—	100～ 120倍	350 ^{リットル} 以上
エコーキー	満開日 追加散布を要する 場合はその2～3 日後に1回	2回以内	2回以内	100～ 150倍	300～ 600 ^{リットル}

- 注) 1 満開日とは7～8割が開花した日で、花びらの散り始めでもある。
 2 マメコバチに対して害作用がないので、マメコバチ導入園で利用しても良い。
 3 ミツバチ導入園で石灰硫黄合剤を利用する場合は、散布前にミツバチの巣箱を回収する。
 4 エコーキーは、花そう葉又は新梢幼葉の葉縁部に褐変(葉焼け)症状が発生する場合があります。

(2) 摘 果

ア 人手による摘果

摘果は早いほど良いが、実止まりが判別できない時期(落花10日～15日後頃まで)にはまず一つ成り摘果を行う。

ただし、つがる、デリシャス系など年により早期落果の多い品種は、落花10日後頃までに一つ成り摘果を終える。

仕上げ摘果は、陸奥では落花15日後頃までに、他の品種は落花25日後頃までに終える。

イ 薬剤による摘果

ふじ、王林、陸奥、北斗、千秋、さんさ、早生ふじ、トキを対象に各品種の満開後2週間頃(ふじでは横径が10mm位の時)、紅玉は満開後3週間頃(横径が16mm位の時)にミクロデナポン水和剤85(1,200倍、展着剤加用)を、果実に十分かかるよう10a当たり350リットル以上散布する。

■標準的な着果程度

品 種	摘果の強さ (残す果実)	着果率 (%)
紅 玉	3頂芽に1果	33
つがる・ジョナゴールド	3.5頂芽に1果	29
ふじ・王林・さんさ・きおう・ トキ・早生ふじ・未希ライフ	4頂芽に1果	25
北 斗	4.5頂芽に1果	22
陸 奥	5頂芽に1果	20

黒星病徹底防除推進期間(4月～6月)

4 病害虫防除

(1) モニリア病

重点防除時期となる「ふじの展葉1週間後頃」と「開花直前」の薬剤散布は、10日間隔を守り確実に実施する。

葉腐れは柱頭感染（実腐れ）の伝染源となるので、見つけ次第、摘み取って土中深くに埋めるなど、適正に処分する。

(2) 黒星病

「開花直前」～「落花20日後頃」が防除上最も重要な時期なので、間隔をあけず10日間隔で散布する。

低温、多雨等で開花期間が長引いた場合には、満開を過ぎたら花が残っていても「落花直後」の散布を行う。

(3) ミダレカクモンハマキ

発生が多い園地では、「開花直前」及び「落花直後」に IGR 剤（ロムダンフロアブル、カスケード乳剤、アタブロン SC）、BT 剤3,000倍（ファイブスター顆粒水和剤、バイオマックス DF）のいずれかを選択し、同一薬剤を連続して散布する。

(4) リンゴコカクモンハマキ

越冬世代幼虫が多い園地では「落花直後」にカスケード乳剤又はアタブロン SC を散布する。

(5) クワコナカイガラムシ

発生が多い園地で、「展葉1週間後頃」にアプロードフロアブルを散布しなかった場合は、「落花10日後頃」と「落花20日後頃」に薬剤による胴木洗いを行う。

■薬剤散布

散布は10日間隔を守り、十分濡れるように散布する。

【農薬はりんご園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。】

回	散布時期	基準薬剤	散布量 リットル/10a
第2回	ふじの開花直前 (5月3日～4日頃)	フルーツセイバー 2,000倍 又はユニックス顆粒水和剤47 1,000倍	320
第3回	ふじの落花直後 (5月13日～14日頃)	フルーツセイバー 2,000倍 又はユニックス顆粒水和剤47 2,000倍 + チウラム剤 500倍 又はジマンダイセン水和剤 600倍	350
第4回	ふじの落花10日後頃 (5月23日～24日頃)	炭酸カルシウム水和剤 100倍 クワコナカイガラムシ防除剤 チウラム剤 500倍 又はジマンダイセン水和剤 600倍	420
第5回	ふじの落花20日後頃 (6月2日～3日頃)	炭酸カルシウム水和剤 100倍 チウラム剤 500倍 又はジマンダイセン水和剤 600倍	500

5 ヒオモン水溶剤によるふじ・早生ふじのつる割れ防止対策

(1) 本剤の効果

開花が早く、大玉になりやすい年や、例年つる割れの多い園地では、ヒオモン水溶剤3,000倍を満開20～30日後散布によりつる割れの発生を軽減できる。

(2) 使用上の注意

極端に樹勢の弱い樹への散布は避け、展着剤は使用せず、単用散布とする。

高温・乾燥時の散布は、新梢先端部の黄変落葉や頂芽の欠落が発生した事例があるので避ける。また、果実肥大が抑制される場合がある。散布後に葉がしおれる症状（エピナスティ）を示すが、1週間後頃にはほぼ回復する。

摘果剤（ミクロデナポン水和剤85）を散布した後に本剤を使用した場合、摘果剤の効果が抑制される。

5～8月は「農薬危害防止運動」実施期間です

農薬の適正使用と隣接農地への飛散防止に十分気をつけましょう

- 使用し残った農薬などは、河川等へ絶対捨てないでください。
- 農薬を使用する場合には、必ず最新の「農薬登録情報」を確認してください。
- 農薬は鍵のかかる専用の場所に保管し、管理を徹底しましょう。

特産果樹

霜害防止対策の徹底と適期作業、適正防除で良品生産を目指そう！

◆ぶどう◆

1 霜害防止対策

りんご同様、霜注意報が出されたら、霜害防止対策を確実に実施する。

2 摘芽・摘梢

養分の競合を防ぎ、日当たりや通風を良くするため、できるだけ早く実施する。

不定芽から伸びたもののうち、予備枝として利用できるもの以外は摘除する。

晩霜害の恐れがある園地では、6月上旬の晩霜の心配がなくなってから最終新梢数とする。

樹勢が強い樹では花振るい防止のため、やや多めに残し、結実の状態をみてから、最終新梢数とする。スチューベンの場合の最終新梢数は、列間2.5mの場合、主枝1m当たり8～10本とする。

春は空気が乾燥し、火災が発生しやすい時期です。剪定した枝などをやむを得ず園地で焼却する場合、山火事など火災の発生防止を徹底してください。

3 病害虫防除

(1) ツマグロアオカスミカメ

発生の多い園地では、展葉直前（5月上旬）にモスピラン顆粒水溶剤2,000倍を散布する。

(2) 灰色かび病

新梢伸長期に多発生が懸念される場合は、ポリオキシシリンAL水和剤又はE B I単剤（インダーフロアブル又はオンリーワンフロアブル）を散布し、新梢での被害を防止する。

(3) ベと病

発生が多い園地では、新梢伸長期（約20cm）にジマンダイセン水和剤、開花10日前（6月上旬）にアリエッティC水和剤又はキノンドー水和剤40を選択する。

また、発病葉や発病果房は見つけ次第、摘み取って処分する。

■薬剤散布

灰色かび病、黒とう病、べと病の重点防除時期なので、昨年の病害発生状況・天候に応じて防除薬剤を選択する。

【農薬はぶどう園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。】

散布時	基準薬剤	散布量 リットル/10a	
新梢伸長期 （約20cm） 5月中旬	ジマンダイセン水和剤	1,000倍	200
	又はポリオキシシリンAL水和剤	500倍	
	又はインダーフロアブル	8,000倍	
	又はオンリーワンフロアブル	2,000倍	
	パダンSG水溶剤	1,500倍	
	又はアグロスリン水和剤	2,000倍	
	又はアディオソフロアブル	1,500倍	
開花10日前 6月上～ 中旬	アリエッティC水和剤	800倍	250
	又はキノンドー水和剤40	600倍	
	又はインダーフロアブル	8,000倍	
	又はオンリーワンフロアブル	2,000倍	
	ベストガード水溶剤	1,000倍	
	又はパダンSG水溶剤	1,500倍	
	又はアグロスリン水和剤	2,000倍	
	又はアディオソフロアブル	1,500倍	

◆おうとう◆

1 霜害防止対策

りんご同様、霜害対策には万全を期する。

2 結実確保

毛ばたきやマメコバチ等による授粉を積極的に行う。毛ばたきによる授粉は、5分咲き頃と満開期頃に少なくとも2回は行う。

3 摘果

紅秀峰や樹勢の弱った佐藤錦等は、結実過多により小玉になりやすいため、満開後30日頃までに摘果を行う。着果程度は、1花束状短果枝当たり2～3果程度とする。

4 雨よけハウスの点検と被覆準備

管内では、老朽化が進んでいる雨よけハウスが見られることから、被覆前に点検し、不具合のある場所は修繕する。なお、被覆時期は例年であれば6月上旬頃であるが、開花時期が早い年では5月下旬に被覆時期を迎える場合もあることから、ハウスの点検と併せて被覆の準備もしておく。

5 病虫害防除

(1) 灰星病

花腐れ防止のため、満開5日後の薬剤散布を遅れないように適期に行う。雨が多い場合は晴れ間を見て散布する。

(2) オウトウハマダラミバエ

発生が多い園地では、満開12日後と満開25日後にダイアジノン水和剤34の代わりにアディオフロアブル2,000倍を使用する。

■薬剤散布

【農薬はおうとう園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。】

散布時期	基準薬剤	散布量(ℓ/10a)
満開5日後 (5月上旬)	パスワード顆粒水和剤 1,500倍	500
	又はオンリーワンフロアブル 2,000倍	
	又はラリー水和剤 2,000倍	
	又はオーシャイン水和剤 3,000倍	
満開12日後 (5月中旬)	オーソサイド水和剤80 800倍	500
	ダイアジノン水和剤34 1,000倍	
満開25日後 (5月下旬)	オーソサイド水和剤80 800倍	500
	ダイアジノン水和剤34 1,000倍	

注) パスワード顆粒水和剤はぶどうの「スチューベン」、「バツファロー (アーリースチューベン)」、「ポートランド」など一部の品種で、軽微な葉害を生じることがあるので飛散しないよう注意する。

◆ブルーベリー◆

1 病虫害防除

園地の除草に努め、害虫は見つけ次第、捕殺する。

2 土壌の乾燥防止

土壌の保水力が高め、雑草を抑制するため、稲わらや籾殻、木材チップ、おがくずを株元に10～15cm程度の厚さで敷く。

降雨がない場合は、乾燥しやすい畑では土が湿るくらい十分にかん水する。

畑 作

大豆の適正は種、小麦の適期の追肥で生育量を確保しよう！

◆大 豆◆

1 ほ場準備

転作田では排水対策として、ほ場周囲に明きよを掘る。

水稲作から大豆作に切り替える時は苦土石灰などを施用し、pH6.0～6.5を目標に土壤酸度を矯正する。

水分が多い状態での事前耕起は、ほ場の物理性が悪化するので、乾燥した状態で作業し、回数も最小限に抑える。

湿害を受けやすいほ場では、うね立ては種等で被害を軽減する。

2 は種期・栽植密度

は種適期は5月中旬～下旬。栽植密度は畦幅70cm前後、株間15cmの2本立てを基本とする。(は種量は10a当たり7～8kg)

は種直後の多雨は、出芽率の低下や初期生育の不良を招くので、気象条件に注意しながら作業する。

やむを得ず、は種が遅れる場合は株間を詰め、は種量を増やす。

3 施肥量

基肥は、10a当たり窒素分量で2～3kgを基準とし、土壤条件、連作等を考慮し増減する。

4 種子消毒とわい化病の予防

必要に応じて、下記の剤で塗沫処理を行う。

剤 名	鳥害防止	紫 斑 病	アブラムシ類(わい化病)
キヒゲンR-2フロアブル	○	○	×
クルーザーFS30	×	×	○
クルーザーMAXX	○	○	○

○：効果あり ×：効果なし

注) クルーザーFS30は鳥害防止効果がないので、鳥害が予想される場合は事後にキヒゲンR-2フロアブルの塗沫処理を行うこと。

5 根粒菌の接種

大豆栽培初年目のほ場は、根粒菌の着生が悪く生育に影響するので、種子消毒後に市販の根粒菌を粉衣する。

6 雑草対策

は種後、速やかに土壤処理除草剤を散布する。ほ場の細土が粗い場合や、ほ場表面の水分が低い場合は効果が劣るので、耕うんをていねいに行うとともに、明きよやサブソイラー等による排水対策を行う。

◆小麦◆

1 追肥

一穂粒数を確保するため、2回目の追肥を5月中旬頃の減数分裂期（止め葉が全体の4～5割開いた時期）に行う。

追肥量は、10a当たり窒素成分で2kgを基準とし、生育に合わせて増減する。

2 排水対策

転換畑では出穂期以降の湿害を防止するため、明きよの設置や排水溝の点検を行う。

3 病虫害防除

(1) 赤かび病

開花期から乳熟期にかけて、気温が高く湿潤な天気が続くと発生が多くなるので、開花始め～開花期に1回目、その7日後に2回目の薬剤散布により防除する。

感染すると収量や品質が低下するばかりでなく、人畜に有害なかび毒（デオキシニバレノール）を生産し、下痢や嘔吐などの中毒症状を起こす場合があるため、出荷できなくなる。

(2) うどんこ病

茎数が多く、草丈が伸びているほ場で発生が予想されるので、病虫害発生予察情報等に注意し、適期防除に努める。

野菜

霜の恐れがある場合は、被覆等により霜害防止に努めよう！
寒暖の差が大きい時期なので、こまめな温度管理を心がけよう！

◆トマト◆

1 定植後の管理

定植後、活着までに日数を多く要し、葉露が発生しない場合は、株元に手かん水を行う。その時に葉色が薄い場合はかん水を兼ねて液肥を株元に施用する。

■追肥肥料例

(2,100株/10a)

肥料名	倍数	1株当たり	必要量/10a	回数
OK-F-1	700倍	300cc	水600ℓ：肥料857g	3～4日おき

根張りを良くするため、かん水は控えめに行う。

ハウス内の温度は昼間25℃前後で管理する。最低気温は15℃以上を目標とし、夜間冷え込むことが予想される場合は、被覆資材や暖房器具等を設置し気温の低下防止に努める。

1段花房の第4花の開花始めにトマトーンを処理する。

わき芽は定植後に活着してから摘み取るが、できるだけ晴天の日に行う。

2 かん水・追肥

試しかん水は、2段花房のトマトーン処理後に1株1リットルを目安に行う。

本格的なかん水・追肥は、3段花房の開花期から行うこととし、1回当たりの追肥量は窒素成分で約0.5kg/10a以内とする。追肥による根焼けを防止するため各液肥の基準希釈倍数は遵守する。

◆メロン◆

1 本畑の準備

定植の2週間前に堆肥・改良資材・基肥を施用し、耕起・整地する。

定植7～10日前に畦立て・マルチングを行い、地温（深さ15cmで18℃以上）及び土壌水分を確保しておく。この時、畦とマルチの隙間を少なくし、密着させると雑草抑制に効果的である。

2 定植時の留意点

定植時には、いわゆる「活着水」として、ポットに温めた水を十分含ませると良い。また、活着水に液肥等を入れると発根促進に効果的である。

定植は温暖な日を選び、作業は朝から夕方まで（地温が下がり始める前まで）とする。

根鉢を崩さないようにポットから出し、深植えにならないように鉢土はマルチ面より高く植え、株元に土を寄せない。

3 定植後の管理

(1) 整枝

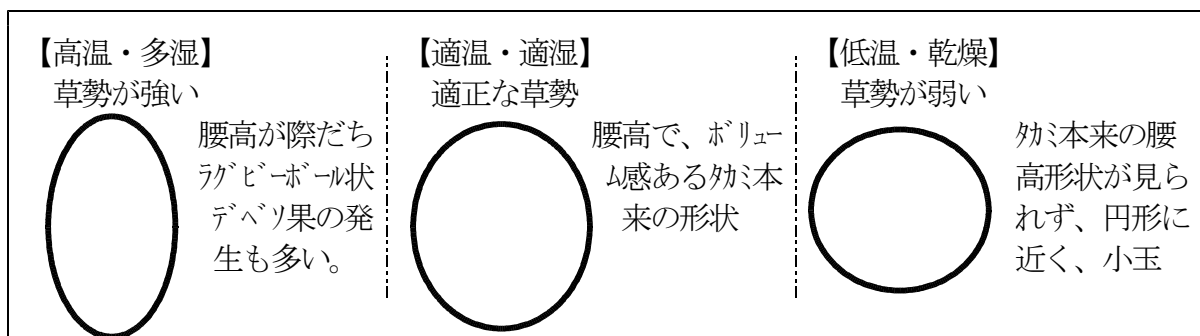
活着後、子づるの伸長を確認したら、生育が揃った2本を残し2本仕立てとする。この際、株元の葉や孫づるなど不要な側枝は除去し、整枝作業終了後に薬剤散布する。

(2) 温度管理等

最高気温28～30℃、最低気温12～15℃を目安に、トンネルの開閉、保温資材（保温キャップ等）の活用でこまめな温度・湿度管理を行う。トンネルの換気は苗の反対側のみ裾上げする。

最上位葉展開時、その6～7節上の花芽が分化開始する。子づるの5葉展開時から開花・結実までの管理が良品生産に重要である。

■花芽発育時の条件と果形との関係（タカミ）



春の農作業安全運動実施中 4月1日～5月31日

ノーミス ノー事故 農作業

家族や仲間と声かけ合って、農作業事故をなくしましょう。

花き

土壌診断に基づくバランスの良い施肥設計で、高品質花きの生産を目指そう！

◆キク◆

1 育苗管理及び定植

8月出し無摘心栽培、9月出し摘心栽培は、6月が定植適期となるため、出荷時期に合わせて挿し芽作業を行う。

育苗期間は15～20日を目安とし、根長が1～2cmになったら定植する。特に小さなセルトレイで育苗した場合は、苗が老化しないよう注意する。

施肥は全量で窒素成分1～2kg/aを基準とし、基肥として6～7割を施用する。施肥前に土壌診断を行い、それに合わせて施肥量を調整する。追肥は、葉色や生育の状況に応じて適宜行う。

温度変化が激しい時期なので、低温時には保温を行うなど、こまめな温度管理に努める。

2 病虫害防除

白さび病は、温度20℃前後の多湿状態で発病しやすい。施設内の換気に努め、親株管理の段階から薬剤による予防散布を行う。また、ハモグリバエ類、アザミウマ類、アブラムシ類等の発生に注意し、早期発見・早期防除に努める。

◆トルコギキョウ◆

1 定植後の管理

昼温25℃以下、夜温15℃を目標に、こまめなハウスの開閉や遮光により適温管理に努める。

定植後は、活着するまで乾燥しないようこまめにかん水し、生育初期に十分な発根を促す。草丈15～20cm以降は徐々にかん水の間隔をあげ、根が深くまで張るよう心がける。

追肥は、生育を見ながら出蕾前までに液肥で3～5回施用する。

地際から20cmくらいまでの側枝は早めに摘み取り、主茎の生長を促す。その際、付け根から除去しないと、再び側枝が発生するので注意する。また、主茎の頂花蕾（1番花）は早めに除去し、側枝の伸長を促し、開花を揃える。

2 病虫害防除

アザミウマ類、アブラムシ類等の発生に注意し、早期発見・早期防除に努める。

◆土づくり◆

施設栽培のほ場では、肥料成分の過剰蓄積が見られるため、ほ場準備に当たっては土壌診断に基づく適正な施肥を行う。